

(はじめに)

本日は進路講座ということですが、今日は、それぞれの進路についての具体的な情報ということではなく、職業人としての私の経験から、日頃考えていることをお話ししたいと思います。その点では、直接的にはあまり有益な話ではないかも知れませんが、皆さん方ご自身が自分の進路を考えていただく参考になればと思います。

[人の魅力は継続する力と若さ]

(多くの魅力的な友人)

私は公務員ではありますが、これまで、商社への派遣や海外での勤務など随分変わった仕事をさせてもらっています。そのお陰で、そのような仕事を通じて本当に沢山の人々と出会い、一緒に仕事をすることができました。その中で、色々な仕事をしている多くの魅力的な友人が生まれています。

例えば、

気象観測の仕事をし、インドネシアの山の中に1年間も観測のために閉じこもったり、南極へ行ったり北極海の氷の上に観測に行ったり、インド洋のモルジブでの観測では観光客とは違ってシャワーもないところで何か月も過ごしたりしている人、

ランドスケープ・アーキテクト、景観設計技術者といって、公園や環境の設計をやっている友人は、シンガポール政府に部長職として10年働いていて、主な都市公園の設計をしたり、シンガポールが世界に誇る植物園のナンバー2として新たに作った蘭園の設計をしたりして、日本に帰ってから後も何年も毎月シンガポールに呼び戻されています。

また、外資系の企業に長く勤めていて、優秀な営業マンとして高い評価を得ていながらも、会社の中で昇進していくことに満足せず、自分で独立してボーリングセンターの経営をしながら、海外との貿易事業も始めようとしている人、

日本の商社に勤めていて、猛烈に働いていたのに、30代に体を壊したのを機に、アルゼンチンに移住して、レストランを経営しながら、地球環境保護のために自分のできることをと1,000ヘクタール以上もの原生林を買い込んだりしている人、

このほか、別に変わった経歴でなくても、地道にそれぞれの仕事で頑張っている本当に魅力的な多くの人がいます。

(共通項は継続する力と若さ)

これらの人々に共通しているのは、継続する力と若さです。

人の若さは、肉体的な年齢だけではなく、その人の夢の量によると思います。

本日の私のお話のテーマは、皆さんの将来の進路についてということですが、皆さんの将来の進路は、一人一人大きく違うと思いますし、また、いろいろな要素で変化していくと思います。ですから、私はここで皆さんが自分の将来の進路はこう選びこう決めるべきだなどというつもりはありません。

また、社会において、一般的に尊敬される特定の職業についているとか、偉い肩書きを持っているとか、沢山の収入があるとかということを優先して考えていると、大切なものを見落としてしまうと思います。

私自身、その人個人に豊かな魅力があり、しかも、現実の社会においてその個性が実際の仕事の成果に結びついて内から輝いている多くの友人を持っている一方で、個人的にはいいものを持ちながらも、歯車がかみ合わず、社会の中での評価につながらずにいる例も数多く見る中で、自分の個性や夢を大切にしながら、社会の中で職業としてそれを生かし、それを楽しみながら良い仕事をしていくことの難しさを感じております。

今日は、私が日々の経験を通じて感じていることを少しお話をしてみたいと思います。

(人と地域の張り)

これは、私が東南アジアで仕事をしていた際に感じたことですが、伸び盛りの人と地域には、夢と勢いがあり、背筋がピンと伸びた感じがあります。

同じ時期に東南アジアで働いていた仲間と話していて感じるのは、日本の社会での危機感の無さや甘えです。恵まれていることを自覚せず甘えている所に人や地域の張りは生まれてきません。

昨今のナイフ殺人事件などを見ていますと、貧しい国で明日のために必死になって頑張っている人々の姿を見せてあげたくなります。

更に感じるのは、そのように頑張っている人々の明るさです。刻苦勤勉で暗く頑張るのではなく、頑張ることを楽しみながらやっている姿です。

映画評論家の淀川長治さんは、常々「私は嫌いな人に出会ったことがない」と言っておられるそうですが、これについて、ある時、「自分は好き嫌いが激しい人間なので、あえてそう言いづけることによって人を好きになろうとしている。そうでないと、人にも自分を好きになってもらえないから」と言われたとのこと。

自分がしかめ面をしてたり、好き嫌いをはっきり出していくのではなく、自分と自分の周囲を楽しい雰囲気にしていくことによって、楽しく仕事をしていくことが大切だと思います。

(21世紀を楽しむ職業人)

そういう意味で、本日の私のお話のタイトルは、「21世紀を楽しむ職業人」としました。

これは、どんな仕事を選ぶのが正しいのかとか、どんな産業や会社がこれから伸びていくのかということではなく、また、単なる会社人間になるのではなく、どんな仕事を選んでも、一生を通じて社会の中で責任を持つ職業人としてどのように過ごしていくのかを考えていくきっかけにしていきたいと思ったからです。

一生を通じて頑張りがつづけていくためには、まず自分自身が自分の職業を好きになり、それを楽しまなければなりません。これは、楽で面白い仕事を選ぶという意味ではなくて、どんな仕事を選んでも、しんどい思いや情けない思いをすることは多く、一生懸命にやっていたらおさらです。そんな中で、肩に力を入れ眉間にしわを寄せて頑張るというのではなく、自分自身がもがいて懸命にやって何かを生み出していくことを楽しむ、そんな者同士が持ちうる共感を楽しむ、そんな楽しみ方をしていただけたらと思うのです。

クラブ活動で一緒に汗を流した仲間同士が共感できるものといった感じでしょうか。

21世紀に生きる皆さん方が、自分の仕事を楽しむ職業人となっていきたいと思っています。

[自分を生かせる仕事]

(自分を生かせる仕事)

つまり、それぞれどのような仕事をしていても、その中で自分の夢を持ち、自分らしさを大切にして、しかもたくましく社会に通用する仕事をするのが大切だと思います。

逆に、自分が自分らしさを生かせるかどうかは自分が選んだ職業によって左右される部分も大きいのではないかと思いますので、自分と自分の将来を考え、どのような仕事を選ぶことがもっとも自分らしさを生かしていける可能性が高いのかを考えていただきたいと思います。

(得意とやりたいこと)

なお、私自身について言えば、皆さんと同じ高校生の時には、数学や物理といった科目が得意で、理科系の進学コースにいて将来はコンピュータ技術者になりたいと思っていましたが、高校3年生の時に文化祭の事務局長をやり、人と一緒に働く面白さを感じて、心理学や社会学を学びたいと思って法学部の政治学科に進み、公務員になりました。

今になって思えば、どんな仕事を選んでも周りの人々と共に一緒に働くことには変わりはないのですが、今日まで来てみて、まあ一つの選択ではあったと思います。

ただ、単にある教科が得意だとか学校の成績が良いからということだけで選ばなくて良かったという面はあると思います。

現在の仕事では、全国で初めてインターネットを利用した救急医療情報ネットワークの開発や、TV電話や画像伝送など情報通信技術のへき地医療のための活用を担当するなどパソコンを使うことも多く、結果としてはコンピュータに縁のある仕事をしています。

[私の職業選択と実際]

(県職員を選んだ訳)

私は、今から22年前に大学を卒業し、県庁に入りました。

先ほど申し上げたように、人と社会を考える仕事をしたいということで大学を選んでいましたので、卒業の際には、お金もうけを考えない仕事をしたいと思い、民間企業に就職することは全く考えませんでした。会社訪問もせず公務員試験だけを受けたのですが、当時は不況の真っ最中で、県庁も史上最高の40数倍という競争率でした。

(県職員としての経歴)

公務員になってからは、新空港の立地計画や人事関係の仕事や産業振興の企画といったいわゆる県庁の仕事以外にも、大手の商社に国と地方を通じて公務員として初めて1年間出向して営業などの仕事を経験したほか、シンガポールに広島県の事務所の初めての所長として3年間駐在し東南アジア各国を舞台に仕事をしたほか、その後も国際関係の仕事で南米各国やアメリカへ行くなど、プライベートも含めるとこれまで20数カ国を訪れており、比較的変わった経験をしています。

このうち、国際関係の部分について言えば、高校の時には理科系が得意で英語は好きでなく、しかも運動部にいたために、英語を好きだなんて軟弱だなどと思っていたのに、こんな仕事をするようになるなんて思いもよりませんでした。

実際、初めて外国人と英語で話したのは商社に出向していた33歳の時で、それから英語の勉強を始め、今でも毎年英語の通信教育を続け、毎週英会話の勉強に行っています。

今44歳で、皆さんから見れば、ちょうど父親の歳でしょうし、現に私の娘も皆さんと同じ高校1年生です。ただ、今も申し上げたように、33歳から私の国際関係の仕事

は始まっていますし、現在では、2年前まではほとんど縁のなかった医療関係の仕事に新たに取り組んでおり、常に新たな気持ちで新しい仕事に取り組んでいます。

(県庁を辞めたい)

ところで、県庁に入って最初の頃は、県庁を辞めたいと思っていました。

基本的には今でもさほど変わってはいませんが、年功序列のいわゆるお役所体質に嫌気がさしたのです。一生懸命にやってる人も、そうでない人も、昇任も昇給も同じで、重箱の隅をつつくようなことをもっともらしい顔をしてやっている、そんな世界に自分の一生を賭けて良いのかと悩んでしまいました。

その時には、ちょうど悩んでいる時期に、良い上司に出会うことができ、そんな世界でも情熱を持って力強く仕事をしているその人の姿を見て、自分も頑張らなければと思って転職を思いとどまりました。

不思議なものでその後は仕事にも恵まれ、県庁マンとしては仕事を楽しませていただいていると思いますが、常にこれで良いのかという迷いや悩みはあります。

(継続による信頼の大切さ)

ただ、一つ思うのは、今の日本の閉鎖型の社会においては、石の上にも3年というか、ある仕事をする上で、その仕事を続けることによって得られた周囲からの信頼というものが大きく影響するのが事実だということです。

海外で何年も仕事をしてみて、いわゆるジョブホッピングといって、自分の能力に適した仕事と評価を求めて何度も仕事を変えていくのが普通の社会で働いてみて、これは海外と日本の大きな違いだと思います。

もちろん、日本式のやり方が良いといっているのではなく、いくつかの大企業などでは現に変化しているのも事実ですが、まだ社会の大勢は変わっていません。

なお、私は医者になりたいからとか、専門職をめざしているから、組織の話は関係ないと思っておられる方もいらっしゃるかも知れませんが、現在日本の医師の7割は組織で働く勤務医であり、専門職と呼ばれる職業においても、チームで働くことが重要だと感じています。

私自身、日本と海外のどちらのやり方が良いのか良く分かりませんが、チームとしての仕事と、個人としての個性と努力というのは、どんな仕事をしていても大切なことだと思います。

(社会のために、現場感覚と総合性)

なお、県庁の仕事についていえば、やはり社会における公的な組織として、お金もうけでなく本当に社会のためになることは何かを考えて働けます。また、国と市町村の間の中間的な中途半端な存在という言い方もできますが、逆に、国にはない縦割りでない総合性や現場感覚を持つと共に、規模の小さい市町村では困難な大きな事業をしていくことも可能です。

自分自身で伸びる力と意欲があれば、社会のために働くというのはやり甲斐のある仕事ですし、社会の色々な分野で頑張っておられる人々の力がうまく生かされるような調整役という仕事もおもしろいものです。

そういった点では、色々な問題はありますが、これまでのところでは、私自身としては、職業として楽しんでこれたかと思っています。

[進路を選ぶということ]

(進路を選ぶということ)

このように、皆さんがどのような職業を選ばれても、むしろ大切なのは、それぞれの仕事において、どのような取り組み方をしていくのかではないかと考えていますが、もちろん、進路の選択はその出発点を決める大切な要素です。

どのような仕事を選んでも一緒だなどというつもりはまったくなく、選んだ仕事に影響されることは、当然ながら大変大きなものがあります。

(熱意を持ちつづけられる仕事)

ただ、その仕事を考える際に、今自分が学校の勉強でどの教科が得意だとか、どの職業がかっこいいとか収入が多いだとかではなく、自分らしさが最も生かされ、一生を通じて自分が継続的に熱意を持って取り組める仕事は何だろうかを考えていただきたいというのが、本日の私のお話ししたいことです。

仕事の選択によって決まることと、その後の取り組みで決まることと、両方あり、どちらも大切だと思います。

ある意味では、進路の選択は一つの賭けであり冒険であり、その選択には自分の責任が伴いますが、それと同時に、それで全てが決まるわけではなく、その後の取り組みで決まっていくものもあるということです。

(事前に全部は分からない)

いずれにしても、どんな仕事も事前にはすべてを知ることにはできませんし、また、始めてから分かること、その後の過ごし方で変わることも多くあります。例えば、総合商社に入ったからといって、全員が海外の営業の現場で活躍する訳ではなく、国内営業専門であったり、内部管理部門にいる場合もあります。

結局、自分の夢にできるだけ近い仕事を選んで、選んだ後も継続的な努力を続けるということしかないのではないかと思います。ある面で結婚と同じところがあるかもしれません。

(私の友人の例)

私は、高校時代にはバスケットをやっていましたが、万年補欠でした。それも5人でやるバスケットに同じ学年では7人しかおらず、2人の補欠の一人です。もう一人の補欠仲間は、その後、大阪大学の工学部に進み、私が県庁に入ったのと同じ年に県庁の土木技師の試験を受け、2百数十人受験してただ一人合格した人物です。

その後、本州四国連絡橋公団に出向したり、県の東京事務所に勤務したりした優秀な技術者ですが、今は知事の秘書をしています。

技術屋としては随分変わった仕事をしていますが、こんなこともあるのです。

なお、彼は、県庁に就職後、法律の大切さを感じ、33歳から43歳まで10年間かけて中央大学法学部の通信教育を受け、昨年無事卒業しました。今の仕事をより楽しみたいから学びつづけるという例の一つです。

[仕事をする上で大切なこと]

(歴史の当事者として)

大袈裟に聞こえるかもしれませんが、将来の進路について考える際に考えていただきたいのは、歴史の中の自分ということです。

大きな歴史の流れの中で生きている自分が、自分らしさを生かしながら、何かささやかでも歴史の歯車を前に動かす動きに参加できるかどうか、社会の中で、自分と社会の中の周囲の人々が少しでもより幸せになるために、自分に何ができるのか、そんな基本的な思いこそが、それぞれの職業の中で自分の仕事に一生懸命に取り組む力を与えてくれると思います。

また、そのような思いを共感できる友人の存在が、しんどい時に一番の励ましとなるのです。

歴史の当事者としての自分の役割を感じていれば、しんどい時にも、もう少し頑張れるのではないのでしょうか。

(すがったり否定したりせずに)

実際、現実の社会の中で、意欲や好奇心を持ち続け実際の努力を続けていくのは、そんなに簡単なことではありません。皆さん方が、今学校で、勉強しなくてはいけないのは分かっている、なかなか思うようにならないのと同じです。

誰しも、楽をしたいものですし、目の前の小さな幸せに浸りたくなって、例えば、好きな人ができれば、何もかも放り投げてその人とずっと一緒にいたいと思うのは当然です。けれども、人が社会の中で生きていて、いろいろな人との相互作用の中で生きている以上、二人だけの世界に浸りつづけることはできません。いくら二人だけの幸せを感じ、周りに背を向けていても、人生というのは生き物ですから、常に新たなものを生み出しつづけていかなければ色褪せていってしまいます。自分の或いは自分たちの頭の中のイメージだけでなく、実際に現実の世界の中でもがいて努力していくしんどさの中で、お互いの共感や思いやりというものが生まれてくる。何かにすがって、或いは、何かを否定し拒否していくだけでは、生きていく面白さは出てこないのではないかと思います。

(スポーツと同じ)

これは、スポーツと同じだと思います。いくら自分が、自分のイメージの中で自分を膨らましていても、例えば、サッカーでどんなにかっこいいプレイをしたいと思っても、現実に地道な筋力トレーニングを日々積み重ねて、毎日チームメイトと実際の動きを練習していかなければ、何もできません。

他人が下手だとか、コーチが悪いとか言っても仕方がなく、そんな愚痴や言い訳ばかりしていて、実際には、彼や彼女とデートしたいと毎日練習をサボりつづけていては、実際の自分の力は伸びていきません。別にデートをすることが悪いといっているのではなく、いろいろな誘惑の中でも、実際に体を動かし努力したものしか自分の身に付かないという現実是不変変わらないということです。

(バランスとタイミングと必然性) —(略?)—

実際に仕事をしていると、バランスということをよく考えます。判断能力としてのバランス、仕事と家庭とのバランス、いろいろあります。また、タイミングというのも大切で、幅広くいろいろと取り組んでいないと、物事が動くタイミングというのは確かにありますから、そのあたりも考えていく必要があろうかと思います。

これは、皆さん方の勉強でも同じで、一つのことを続けることは最も大切なことです。が、そればかり考えていると、かえって伸びないということもあるのではないかと思います。

もう一つ考えていただきたいのは、必然性ということです。物事が動くためには、必然性があるかどうか大切なことであり、逆に必然性に裏付けされていないことは、で

きないか、長続きしません。

(自分自身の力による努力)

ところで、このような自分の力を生み出していく中で、親の力、努力というのは確かにあると思います。例えば、小さい時からピアノや英語という習い事をさせてもらったことにより身に付けていったものも、もちろん自分の努力により身に付けていったものですが価値はあります。

と同時に、これから大事なのは、そういった基盤に対して、皆さん方自身の意思と努力によって何を付け加えていくのかということです。自分自身の意思と努力によって、自分自身の限界をどれだけ広げていったかが、大切なのではないかと思います。

そうして、自分の意識的な努力によって築き上げたものこそが自信につながり、苦しい時に頼れるのです。

(設計図と肉付け)

先ほど申し上げた、自分自身のイメージと実際の自分の現実というのは、設計図と肉付けという言い方もできるかと思います。高名な日本画家の平山郁夫さんの書かれたものを読んでみると、生きているうちに高い評価を受ける人も死んだ後に評価が高まる人も、いずれの場合も、その人の評価されるポイントは30歳までに作られていると書かれていました。

これは一面事実だろうと思いますが、別の面で言えば、30歳までに描いた設計図を肉付けしていくのは30代、40代だと言えるのではないかと、自分の経験を通じて感じています。いくら立派な設計図を描いていても、それを現実化するための地道な肉付けの努力ができないと仕方ありません。

世の中、自分の思い通りに、自分のイメージ通りに進むことというのはむしろほとんどなく、そんな中で投げやりにならずに積み重ねをして、自分の描いた設計図に肉付けをしていくことは、どんな仕事を選んでもそんなに簡単なことではありません。

思うようにならないことや、ぶざまな自分を認めて、そんな現実と付き合いながらコツコツ頑張っていくしかないのです。

(かっこつけない)

そんな時に大切なのは、形から入らないということです。

誰でもかっこよく生きたいものですし、かっこいい自分を見てもらいたいものです。

それ自体は別に悪いことではなく、それに実態がついていく努力をしていけば良いのですが、往々にして、見かけのかっこよさを優先して中身がなくなるということにもなりかねません。自分のつくったイメージに舞い上がったり、完璧な自分しか許せなくなったりしてしまうと、泥臭い努力ができなくなってしまう恐れもあります。

県庁にも時々いるタイプですが、頭の良い優等生の自分のイメージを壊したくないために、新しいことに取り組まずに、自分の箱庭の中だけを隅から隅まできれいに掃き清めて、それ以外のことについては、やらない理由やできない理由を並べ立てる、こんなことにはならないような意識的な努力が必要ではないかと思います。

仕事をしていく上でむしろ大切なのは、物事がうまく行かなくて落ち込んだ時に、悔しい思いや情けない思いをして、くそったれと思いながら頑張った経験ではないかと感じています。そんな経験を通じてしか身に付かないものがあると思いますし、恵まれつづけていることが幸せかどうかは、長い目で見て分からないところがあります。

(山から下りて登り直す)

どんな仕事をしていても、今よりも何か新しいものを生み出そうとすると、必ず何かを捨てて新たな挑戦をしていく必要があります。山登りにおいて、小高い山に登っている人がより高い山に登ろうとすれば、一旦その山から降りて登りなおさなければならぬのと似ています。そうしなければ、いつまでたっても小さなお山の大将で終わってしまいます。

自分が努力して登った山のお山の大将であることを捨てて、新たなことに取り組むことは、そんなに簡単なことではありません。

そうならないためには、肩に力を入れて小さな無駄も許さないガチガチの姿勢ではなく、肩の力を抜いて一生懸命努力している過程自体を楽しむことが大切だと思います。

仕事の選択や人生は、勝ち負けではないのですから、一時的に失敗したりうまくいかなかったりしても、大きな目を見て、そんな自分も認めていかなければ、一旦築いた実績を捨ててより高い山に登りなおすために、今立っている小山から降りることはできません。

(出口のタンク)ー(略?)ー

いまのお話は、私が大学時代に山に登っていたことから思い付いたたとえですが、もう一つ山登りで学んだことがあります。

厳しい山登りをしていれば、必ずバテル奴がでてきます。私自身も経験がありますが悲惨なものです。重い荷物を持ってぎりぎり歩いていて、もうだめだ、次の曲がり角まで行ったらギブアップしようと思ながら歩いているのですが、不思議なもので誰かがギブアップしてくれると、それまでギブアップ寸前だった他のメンバーは急に元気になって、大丈夫か、少し荷物を持ってやろうかななどと言い出します。

これを私は、出口のタンクとメインタンクというふうに考えています。すなわち、エネルギーを出していくのに、自分のメインタンクから出口の小さなタンクに一旦移して外に出していく。普通はその出口のタンクが空になってしまうとバテたと感じてしまいますが、実際にはメインタンクにはまだ余裕があるということも多いのではないかと思います。もちろん、とっさの場合の瞬発力は出口のタンクの大きさによるのですから、これも大切ではあるのですが。

こんな経験から、私は、「精一杯やった」という言葉をあまり信じなくなってきました。その時に限界まで頑張ったというのは事実かもしれませんが、それはある特定の瞬間の話であって、スポーツの世界とは違い職業の世界では、もっと大きな時間の流れの中で評価されます。一定時期だけ頑張っただけでバテてしまったのではしょうがなく、いかにバテないようにうまくコントロールしていくかが大切ではないかと考えています。

[生きる時間]

(時間の長さ)

ここで、少し皆さんの一生の時間の長さとその割り振りについて考えてみていただきたいと思います。

現在の平均寿命は約80年。現在の皆さんは16～17歳。小学校1年生から数えて学校で勉強してきたのは約10年。今から大学まで行っただとして学校で勉強するのは6～8年程度です。それから社会の第一線で働くのは約40年、さらにその後、約20年

という時間があります。

ここで強調したいのは、今日のテーマである皆さんの進路というのは、主にこの、社会に出てからの40年という皆さんの人生におけるもっとも大きな部分を考えるということです。

今の時点で既に、勉強の出来・不出来や、クラブでの得意・不得意といったこと、優越感や劣等感、色々なことがあると思いますが、それは今までのたかだか16～17年の皆さんの人生のうちの学校に入ってから約10年、さらに言えば、皆さんが自我に目覚め、自分というものを考え出して自分自身が意識的な努力を始めてほんの数年という時点にいらっしゃるということです。

(積み重ねの連続)

そんな短い時間の結果としての現在の状況だけで将来が決まるものではなく、むしろ、今から社会に出るまでの何年間、高校を卒業するまでのあと2年間、さらに大学や専門学校に進む人はその時間、そして社会に出てからの数十年間を、自分はどうやって常に生き生きと過ごしていくのか。その時間の長さや重さを考えていただきたいと思うのです。

もちろん、いつもうまく行く訳ではなく、失敗したり落ち込んだり、やけになったりすることもあると思いますが、忘れていただきたいのは、うまくいった時期もそうでない時期もすべて事実として積み重なっていく訳で、いいとこどりはできません。現在は過去の積み重ねの結果ですし、未来は現在の積み重ねの結果です。

いくら世間で言う「いい学校」に入っても、その後の努力がなければそこで止まってしまうし、一般的に言われる「いい仕事」や「いい会社」に入っても、流れに流されて自分なりの努力を積み重ねていかなければ、個人としての魅力は生まれてこないと思います。できない自分、ぶざまな自分も認めて、こつこつと積み重ねをしていくしかないのではないかと考えています。

(時間の長さは平等、時間の違い)

更に言えば、この時間の長さは、誰にも平等だということです。

恵まれている人もそうでない人も、運のいい人も悪い人も、時間は同じスピードで流れます。

もう一つ、時間に関して言えば、学生時代の時間と社会人としての時間の違いです。

学生時代の勉強は、いわばタイムレースのようなもので、限られた時間の中でどれだけ勉強したかが問われます。いわば、要領の良さが問われる面もありますが、社会においては、どれだけ学びつづける気力を継続するかが問われるのです。

短距離走と長距離走の違いのようなものです。

時間を大切に、限られた人生の時間の中で頑張ることが面白いと思えると、成果も出ますし次にも頑張れるけれども、面白くないと思いながら投げやりに行っていたら、人からも評価されませんし次のチャンスも回ってきません。

(生きるということのイメージ)

その際に大切なのは、皆さん自身がそれぞれの生きるということのイメージを持つということではないかと思っています。日本では、外国に比べて、生きるということや死ということについて語られることが少ないという指摘もありますが、やはり、自分が生きているということについてのイメージを持っているかどうかは大切なことではないかと思っています。

私の場合、高校、大学時代から思っているのは、暗い海に一人生まれ落ちて泳ぎ出し、そしていつか力尽きて沈んでいくというものです。大きな海の中で、どこに生まれたかとか、どこまで行ったかは問題ではなくて、むしろ、色んな波に翻弄されながら、色んな流れに流されながらも、自分が選んだ方向をめざして泳いでいく。

大切なのは、ゴールのない海の上で、生きているうちに、いつも一生懸命にはできないにしても、どれだけ精一杯自分の腕を伸ばして水を掻いて泳げたかではないだろうか。そう考えると、随分気が楽になります。

恵まれている時もそうでない時もあります。お金持ちの家に生まれたりそうでなかったり、頭が良かったり美人だったり或いはそうでなかったり、運が良かったり悪かったり、でも、そんなことはすべて相対的なことであり、大きな海の中で、他人よりも少し前を泳いでいるかどうかを言っても仕方ないと思います。

もちろん恵まれていることに越したことはありませんが、それによって増長してしまえばむしろ悲劇ですし、そんな例はいくらかもあります。逆に、恵まれていることを遠慮することはなく、それを無駄遣いせず、それを活かして自分のできることに最大限取り組みんでいるかを問い掛けるべきではないかと思っています。

(私自身は文学にはあまり縁はありませんが、「詩」についていえば、純粋な詩を追求していくのも価値があるにしても、むしろ、自分自身の詩の心を現実生活の中で具体化していくのが大切ではないかと思っています。

そんな中で、どんな仕事を選んでも、たくましさや優しさを併せ持って、粹がらずに淡々と努力をしていけるのではないのでしょうか。)

[海外から見た日本の社会・組織]

(シンガポール)

漠然とした話が続いたので、シンガポールに行って海外の社会の中で働いてみて感じたことを少しお話ししてみたいと思います。

ところで、皆さんが東南アジアやシンガポールについてどの程度ご存知か分かりませんが、国民一人当たりの豊かさでは、シンガポールは日本を上回るということをご存知でしょうか。

各国の人々の平均的な豊かさを表わすために、一人当たりのG N Pという数字を使います。1995年の数字では、日本が約4万ドルでシンガポールが2万7千ドルで日本の方が多いのですが、これに物価を加味した購買力平価での一人当たりG N Pをみると、国際的に高い日本の物価の関係で、逆にわずかですがシンガポールの方が日本を上回ります。なお、シンガポールは、元イギリスの植民地でしたが、現在ではイギリスやフランス、ドイツを上回っています。

このように勢いを持って急速に伸びている国というのはどのような国なのでしょう。今日は、シンガポールのお話を詳しくする時間はありませんが、そこでは、世界と結びついたグローバル化と個人の力を重視したダイナミズムが進んでいます。

シンガポールでは、33年前の独立以来、大きな社会の変革が進められており、そのような伸び盛りの国と対抗していくためには、日本においても、変化を生み出していくことが求められています。

(グローバル化とダイナミズム)

シンガポールの面積は、広島市よりも小さく、その人口は広島県とほぼ同じです。

そんな小さな国が、世界の歴史ある大国と対等に頑張っているのです。

人の後を付いていくのではなく、みずからの意欲で世界を見詰め、ダイナミックに活動していけば、それが可能になるのです。

この点では、広島でももっと色々なことができるかも知れません。

常に他人の存在を意識して、格好を気にして生きていかざるを得ない東京でなくても、地方で地域に根差した活動をグローバルな視野でダイナミックに展開していれば、沢山の可能性があります。先ほど申し上げたように全国で初めての情報ネットワークということもできますし、全国的な評価が受けられることもあります。

(シンガポールの教育制度)

- ・ 高校教育：日本＝基礎教育，シンガポール＝大学予科
- ・ 極端な成績主義，2言語政策，ポリテクニク

(未来，現在，過去)

よく言われることですが，海外の社会は，個人の実力が評価される社会であり，ある面では大変厳しい社会です。

そんな社会で働く中で感じたことは，自分を表現する際の3点セットの大切さです。3点セットというのは，未来，現在，過去ですが，自分が将来どんなビジョンを持ち何をやりたいと考えているのか，そのために現在どんな努力を取り組みをしているのか，また，その結果としてこれまでどんな成果が結果が出ているのか，この3点セットで自分が語れなければ，個人として評価されないという側面があります。現在の皆さんはどうでしょうか。

(英語について)

英語についていえば，シンガポールで実際に英語を使って仕事をしてみて感じたことがいくつもあります。

シンガポールの事務所は，私と地元のアシスタントさんの二人だけでした。アシスタントさんとの話も，地元の人との話しもすべて英語だったわけですが，そんな英語漬けの世界で，英語について特に三つのことを強く感じました。

一つは，日本の英語教育で英文レターの書き方がほとんど教えられていないということ。これは，シンガポールにいる間中，毎週一回ビジネスレターの書き方の家庭教師について勉強しました。

もう一つは，日本語から英語にする際の手順です。私たちが普段しゃべっている日本語は，論理性を重視する英語からしてみれば極めて漠然としていて，いわば情緒的日本語とでも呼びたくなるものです。「例のあれがああじゃけえ，まあええがにしといてや」という話など，そのまま英語に移しようもありません。

このような情緒的日本語を，まず論理的日本語に移してから英語にしないで，そのまま英語にしようとする，文法的には正しくても何を言いたいのかさっぱり分からないということになります。

三つ目は，英語について，すぐ「ペラペラ」と聞かれることです。All or Nothingではなく，それぞれのレベルがあり，それぞれのレベルに合わせたコミュニケーションを図ればよいのですが，このように考えてしまうと，逆に，自分はペラペラでないからもうだめだという諦めを生んでしまうのではないかと思います。

(議論の構成力)

このほかにも，議論の構成力の違いも感じています。

長い間閉鎖型の農業社会を過ごしてきた日本では、以心伝心とか不言実行とか、言葉で自分を表現することの訓練や議論の構成力が不足しているのではないかと思う機会が何度もありました。

特に問題だと思うのは、すぐに結論を出したがりたり、決め付けたがるということですね。その方が簡単ですし、一見自信ありげでカッコ良いのですが、英語での議論には通用しません。異質な意見を認め、自分の主張をきちんと論理立てて説明するというのは根気と訓練が要りますが、これからは大切なことではないかと思います。

(思い込みと先入観)

すぐに結論を出したがりたり決め付けたがるという点では、私にも失敗の経験があります。

シンガポールに赴任して、救急車がサイレンを鳴らさずに走っているのを見て驚きました。日本から来る人にその話をしていたのですが、ある日サイレンを鳴らしている救急車を見ました。聞いてみると、普段は渋滞が無いので鳴らさないが、必要がある時だけ鳴らすのだとのこと。

自分がこの目で見ただけで間違いないといっても仕方の無いことで、絶対だとか全部とかみんなとかということが、どんなに当てにならないか、むしろ、すぐに決め付ける言い方はあまり信用しないほうが良いのではないかと感じています。

(グループ内お友達主義)

さらに基本的な行動様式の違いとしては、グループに属したがり、その中でみんなと同じ行動をとり、同じグループの仲間には非常に親切なかわりに、グループの外の者にはよそよそしいということがあるように感じます。

個人を重視し、個人が何を考え何をするのかを問い掛けていくことも必要ではないかと感じています。

(女性と仕事)

ところで、海外に比べて、現在の日本の社会は、確かに女性にとって不利な面が多いと思います。チームで継続した人間関係の中で仕事をしていく中で、出産や育児で中断する可能性のある女性には重要な役割やポストを提供しないということは、現実的にはまだまだあります。しかしながら、それが社会のあるべき姿ではなく、また、そのような状態が未来永劫に続いていく訳でもありません。

私のいましたシンガポールでは、多くの重要なポストに女性が数多くついていましたし、他の国でも同様の例は数多くあります。

また、今の日本でも輝いて仕事をしている個人として魅力的な女性は多くいらっしゃいますし、全ての舞台条件がそろわないと何もできないというのではなく、それぞれの時点で、それぞれの置かれた環境で、まずやっていくということも必要かと思います。

もちろん、そういった社会の問題点を改善していく努力が必要であることはいうまでもありません。

[要点の確認]

(具体化することの大切さ)

いくら良いセンスや良いものを持っていたり、また、いくら高い技術や技能、知識を持っていたり、それらが実際の現実の社会において具体的な成果、結果として示されな

ければ、世間の評価はついてきません。

良いものを持っているという可能性だけでは、世間は評価してくれません。

以前、商社に派遣される時に読んだ本で、リストラされる社員にその商社が転職先を斡旋するためのインタビューで、あなたの魅力、価値は何なんだと会社側が聞いて、私の魅力は誠実さですと答えた社員に、それだけではだめだ、あなたがその結果何を身につけて何を実現してきたのかが問題だと会社側が答えたという話を見つけて、随分厳しい話だと感じましたが、一面真理ではあると思います。

そんな時に、分かってくれない世間が悪いんだといってすねてみても仕方のないことで、もっとたくましく、現実の世界の中で素直さを生かして、懸命に生きていていただきたいと思います。

(職業としてのプライド)

いずれにしても、どんな仕事を選ばれても、その仕事に職業としてのプライドを持って取り組んでいただきたいと思いますし、逆に、どんな仕事でも自分が一生を通じて懸命に取り組んで行ける仕事を選んでいていただきたいと思います。

また、どんな仕事を選ばれても、いつも意欲を持ってセンスの良い仕事をしていていただきたいと思います。

(まとめ)

思い付くままに、とりとめのないお話をしてきましたが、要は、

- 学校の勉強で何が得意かだけでなく、自分が一生を通じて熱意を持って努力を続けられる仕事は何かを考えていただきたいということ、
- そして、どんな仕事を選んでも、常に、歴史の中の自分を意識し、歴史の当事者として、それぞれの立場において、少しでも歴史の歯車を前に動かすための努力をしていただきたいということ、であり、
- 最後に、人生を通じて運・不運というのは付き物であり、だからこそ、自分がどこまで行ったかではなく、自分自身の限界をどれだけ広げられたかを考えていただきたいと思います。それによって、同じように努力している人々との共感ややさしさも生まれ、また、運・不運の波にもてあそばれることなく、また、恵まれていない人にも暖かい心で接していただけるのではないかと思います。

(最後に)

最後に、皆さんが、人生にしらけず開き直らず、かといって、がり勉で周りが見えなくなるのでもなく、淡々と地道に努力を積み重ねて、皆さんが選んだ仕事を人生を楽しんでいていただくことを願って、話を終わります。

ご静聴ありがとうございました。